

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月17日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009年度～2011年度

課題番号：21720121

研究課題名（和文） 日本中世禅林における柳宗元受容の研究

研究課題名（英文） Study on Acceptance of Liu Zongyuan in Japanese medieval Chanlin

研究代表者

太田 亨（OOTA TOORU）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：80370021

研究成果の概要（和文）：日本中世禅林における柳宗元の受容について、日本に伝来した柳宗元の作品集、日本で出版された柳宗元の作品集、作品集に書き入れされた記事、禅僧の作品解釈、禅僧の詩文中に見える柳宗元等を追究した。

研究成果の概要（英文）：I investigated on Acceptance of Liu Zongyuan in Japanese medieval Chanlin. The contents are the works of Liu Zongyuan which got across to Japan, the works of Liu Zongyuan published in Japan, the report written in and used as the book, Zen monk's interpretation about works, Liu Zongyuan who are visible to a Zen monk's work and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2011年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：日本漢文

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学・国文学・五山文学・柳宗元・抄物

1. 研究開始当初の背景

日本における漢文学の受容史上、その成果が極めて顕著に世に示された時期が三度存在する。第一期として奈良・平安時代の貴族の漢詩文、第二期として鎌倉末期より室町時代に栄えた五山禅僧の漢詩文、第三期として江戸時代の文人の漢詩文がそれにあたる。近來の日本漢文学の研究を概観すると、第一期の奈良・平安時代と第三期の近世江戸時代の漢詩文に眼が向けられる傾向が強い。そのため、中間の鎌倉・室町期の禅僧の作品は、その存在を認められながらも、敬して遠ざけら

れていると言える。

さらに禅林における中国文学受容に関する研究について言えば、従来の研究方法は国文学研究領域と中国文学研究領域が間断されており、広い視野から見た統合的な研究がなされていない感がある。

中国における様々な文人が製した詩文集・総集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、といった点については、部分的な研究は存在するも、体系的にとらえた研究は未だにほとんど研究がなされていない。

筆者が着目した文人・柳宗元は、中国においては高い評価を得ながらも、日本中世禅林においてどのように受容されていたか全く不明と言える。

本研究以前、科学研究補助金を得て、「日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究」(2006年度から2009年度)を行った。当研究では、五山版の所在と書き入れの状況、『柳文抄』の概要、禅僧の柳宗元への接し方等といった全体の概要がつかめただけで、文字通り基礎的な研究に終わったと言える。

本研究は基礎的研究をさらに発展させたものである。

2. 研究の目的

筆者の研究の全体構想としては、中国における様々な文人が製した詩文集・総集がどのように日本に流入し、禅僧がそれらをどのように解釈し、自身の詩文作成に昇華させていったか、ということの解明することである。

本研究の目的は、柳宗元の詩文がいかにかに禅林において受容されていたかについて解明することである。この度の交付期間においては、前科学研究費補助金を受けた「日本中世禅林における柳宗元受容の基礎的研究」(2006年度から2009年度)をさらに発展させる。とりわけ、三年間という期間の中で、下記Ⅰ～Ⅲについて、さらに深く追究することを主たる目的とする。

Ⅰ：中国より日本禅林に流入した柳宗元の詩文集と禅林で製された柳宗元の詩文集（五山版）の実態を解明すること

Ⅱ：禅僧が柳宗元の詩文について注解した抄物（両足院所蔵『柳文抄』と五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れ抄）の実態を解明すること

Ⅲ：禅僧が自身の詩文に、柳宗元に関する事項をどのように詠出したかについて解明すること

三点について深く掘り下げて研究を行った後、三点がどのように関連するのか考究する。

3. 研究の方法

目的に応じて以下のように研究を行う。

Ⅰについては、日本中世に出版された五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』が、柳宗元研究史においてどのような価値を有しているのか、底本の存在とそれとの比較を行

いながら実証する。また、五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』は所蔵されている機関が多く、大凡の場合、訓点や書き入れが施されている。それらの書き入れにも着目し、いろいろな観点から五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の特徴に迫る。

さらに中世にどのような柳宗元の作品集が伝わり、それらにどのような価値があるかについても、当時期の刊行された版本と比較を行うことで実証していく。

Ⅱについては、これまでに両足院所蔵『柳文抄』と国立歴史民俗博物館に所蔵されている五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れの関係が深いことから、両者を比較することで、『柳文抄』に天隠龍沢が深く関わっていることを論じた。本研究期間に『柳文抄』の内容をさらに吟味する。作品の排列よりいずれのテキストを底本にしたか選定し、抄の中に出てくる講抄者を整理していく。『柳文抄』は影印本が刊行される予定であり、筆者はその解題を担当する。

また、禅僧が柳宗元の個々の作品をどのように理解したか考察するため、『柳文抄』及び五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の書き入れを読解していく。禅僧の柳宗元解釈の価値について迫りたい。

Ⅲについては、『五山文学全集』と『五山文学新集』に収められている各禅僧の詩文集、及び禅僧が製した文学作品において、柳宗元がどのように詠出されているかについて精査する。まだ翻刻されていない禅僧の作品集も存在するので、それらに関しては所蔵機関で閲覧し、確かめる必要がある。これまで初期（鎌倉時代末期～南北朝時代末期）の禅僧の詩文にどのように柳宗元が詠出されているのか考察したので、本研究期間では、中期（南北朝時代末期～応仁の乱頃）と後期（応仁の乱頃から室町時代末期）の禅僧の詩文に着目する。そして各時期にどのように受容が変化しているかについても追究する。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはいずれも深く関連している。それぞれの点を調査するも、総合的に研究を深めていくことにする。

4. 研究成果

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの目的に応じて以下に研究成果を述べる。Ⅰについて、下記の点について考究、論文発表をおこなった。

①版本・宋版『唐柳先生文集』の復元とその価値について

宮内庁に所蔵される『新刊五百家注音弁唐

柳先生集』の書き入れに、宋版『唐柳先生文集』を校勘に用いた字の異同が書かれていることが判明した。宋版『唐柳先生文集』は柳宗元作品集の原形とも言える三十三巻で構成されており、現在静嘉堂文庫に残巻が所蔵されているのみである。散佚した宋版『唐柳先生文集』と静嘉堂文庫本との関係、異同に見られる作品本文の価値を検討すると同時に、書き入れの重要性を論じた。

②蓬左文庫所蔵鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』の価値について

鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』は一三二二年、聡達なる僧が武蔵国の金沢学校で模写した書である。模写した宋版『音弁本』は、別集「非国語」を正集として扱う四十五巻本『音弁本』であり、現在通行している元刻『増広註釈音弁唐柳先生集』には見られない潘緯や劉欽の序を所収していた。この親本とした四十五巻本『音弁本』と通行四十三巻本『音弁本』とは、本文にも異同があり、四十五巻本『音弁本』の方が誤植が少ないことが判明した。鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』は、この親本を忠実に模写しているが、新たに『音註唐柳先生文集』巻二の三賦と不明氏の年譜後序を付加しており、宋代の柳宗元集が色濃く繁栄された貴重な孤本といえる。

③五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』の価値について

中世禅林で五山版として刊行された『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』は、これまで四庫全書に所収される宋版『五百家註唐柳先生文集』を底本として刊行されたと認識されていたが、実際には北京図書館に所蔵される『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』を底本としており、さらには諸本と校勘して適当と思われる本文に改めた箇所、解釈に必要な『音弁本』の注を引用した箇所が存することが分かった。日本にしか存在し得ない貴重な版本と言える。その原因として、刻工者である学士・兪良甫が優れた柳文注釈書を刊刻しようとしたためだと論じた。

また東北大学に所蔵されている五山版『新刊五百家註音辯唐柳先生文集』には、おびただしい書き入れが施されており、その書き入れが両足院蔵『柳文抄』と深い関係にあること、在先希讓・太白真玄・勝剛長柔・希世靈彦・湖月信鏡・萬絮といった著名な禅僧の抄であることを論じた。

Ⅱについて、下記の点について考究、論文発表をおこなった。

①『柳文抄』について

両足院に所蔵される『柳文抄』を影印出版し、その解題を担当した。多くの禅僧の抄に

よって成立しているが、仮名抄と漢文抄の二つの抄から成り、仮名抄は江西龍派の講抄が、漢文抄は惟肖得巖の講抄が中心であることが分かった。また仮名抄の底本には『新刊五百家注音弁唐柳先生集』が、漢文抄の底本には『増広註釈音弁唐柳先生集』が用いられていることが分かった。そして、『柳文抄』の編纂者として天隠龍沢の可能性が高いことも論じた。

②禅僧の柳宗元の作品解釈について

中世禅林における柳文解釈がどのようなものであったか、まず「乗桴説」を取り上げて検討した。『柳文抄』は勿論のこと、五山版『新刊五百家注音弁唐柳先生文集』の書き入れを資料に用いた。宗旨に関連させる禅僧ならでの解釈や典拠にこだわって解釈する傾向が強いことが判明した。

次いで、「送薛存義之任序」を取り上げて検討した。『柳文抄』と五山版『新刊五百家注音弁唐柳先生文集』の書き入れを利用すると同時に、『古文真宝』の抄も利用した。柳宗元の作品集のみでなく、総集においても柳宗元の受容が存することを論じた。

Ⅲについて、下記の点について考究、論文発表をおこなった。

①中期禅僧の詩文中における柳宗元像について

中期(南北朝時代末期から応仁の乱頃まで)の禅僧が、柳宗元をどのように詠じているか、中期禅僧の詩文作品を調査した。多くの禅僧が柳宗元について詠じており、その内容は、柳宗元の為人に着目したり、宗旨に関連する場面に柳宗元の詩文を援用したり、柳宗元の詩を対象にした画図に賛詩を付していること等が分かった。

②後期禅僧の詩文中における柳宗元像について

後期(応仁の乱頃から室町時代末期まで)における禅僧の詩文集の中に柳宗元に関する事項がどのように詠出されているか、後期禅僧の詩文作品を調査した。検討した。大凡は初期・中期の詠出を継承するものであったが、「寒江獨釣図」に対する賛詩・称揚文は後期になって一段と増えているという特徴が見られた。

以上のように、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについての概要を検討することができた。日本中世禅僧が柳宗元の作品を愛玩し、その文学の中に取り込んでいった様相の一端が解明されたといえる。時期が下るにつれてその受容が深まるのは、禅僧の文学観・禅観が変化していったためであろう。今後はさらに細部・深部を考究

すると同時に、柳宗元以外の詩人・文人が日本中世禅林にどのように受容されていったかも考究する必要がある。

公表に関しては、日本文学に関連が深いものはなるべく国文学関係の雑誌に、中国文学に関連が深いものはなるべく中国文学関係の雑誌に公表するようにした。この姿勢をさらに続け、日本文学研究分野と中国文学研究分野に貢献し、両分野の架け橋になることができるように、研究を続けていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 太田 亨、蓬左文庫所蔵鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』について、『中国文史論叢』(下定雅弘教授退休記念号)、第 8 号、pp43～54、平成 24 年 3 月、査読有
- ② 太田 亨、東北大学所蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』について一書き入れ抄文の検討一、『中国古典文学研究』、第 9 号、pp1～11、平成 23 年 12 月、査読無
- ③ 太田 亨、日本中世禅林における柳宗元受容一後期の場合一、『愛媛大学教育学部紀要』、第 58 巻、pp269～284、2011 年 10 月、査読無
- ④ 太田 亨、五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』について一五山版の再検討をめぐって一、『文学』12 巻第 5 号(2011)、pp181～195、平成 23 年 9 月、査読有
- ⑤ 太田 亨、静嘉堂文庫所蔵宋版『唐柳先生文集』残巻について、『東方学』第 122 号、pp29～46、平成 23 年 7 月、査読有
- ⑥ 太田 亨、五山文学概説、『古代中世日本の内なる「禅」』(『アジア遊学』第 142 号)、pp112～118、平成 23 年 5 月、査読有
- ⑦ 太田 亨、宋版『唐柳先生文集』巻十四「説」部の復元一書陵部所蔵『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』の書き入れを手がかりに一、『中国古典文学研究』、第 8

号、pp73～84、平成 22 年 12 月、査読無

- ⑧ 太田 亨、日本中世禅林における柳文解釈一「送薛存義之任序」の場合一、太田亨、『愛媛大学教育学部紀要』、第 57 巻、pp289～310、平成 22 年 10 月、査読無
- ⑨ 太田 亨、日本中世禅林における柳文解釈一「乗桴説」について一、『中国古典文学研究』、第 7 号、pp17～32、平成 21 年 12 月、査読無
- ⑩ 太田 亨、日本中世禅林における柳宗元受容一中期の場合一、『愛媛大学教育学部紀要』、第 56 巻、pp345～356、平成 21 年 10 月、査読無

[学会発表] (計 3 件)

- ① 太田 亨、日本中世禅林における杜甫と禅一中期の場合一、国際高等研究所プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究一禅をケーススタディとして一」、2011 年 12 月 17 日、国際高等研究所学
- ② 太田 亨、日本中世禅林における杜甫と禅一虎関師錬の詩話に着目して一、国際高等研究所プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究一禅をケーススタディとして一」、2010 年 12 月 17 日、国際高等研究所
- ③ 太田 亨、静嘉堂文庫所蔵『唐柳先生文集』(宋版)の残巻について、中唐文学会第 21 回大会、2010 年 10 月 8 日、広島市まちづくり市民交流プラザ

[図書] (計 1 件)

- ① 太田 亨、臨川書店、両足院叢書『柳文抄』(解題部分)、2010 年、804 頁(pp.739～797)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 亨 (OOTA TOORU)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：80370021

(2) 研究分担者

該当無し

(3) 連携研究者

該当無し